

茶の湯文化学会会報 No.50

第50号 / 2006年 8月25日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

茶道古典体系の刊行を夢見て

筒井 紘

茶の湯文化学会の学会誌『茶の湯文化学』は、現在十二号が刊行されている。その間、茶の古典の復刻は、松屋元亮の『茶の湯秘抄』をはじめ、近衛尚嗣の『茶湯聞塵』や『追憶集』、『二代三代將軍御会記』、『片桐石州自会記』などの貴重な茶書が復刻され、茶の湯研究者の資となつてゐるのは喜ばしいことである。さらに、『茶道文化研究』（今日庵文庫）・『研究紀要』（野村美術館）・『茶の湯研究 和比』（不審菴文庫等）の紀要中での資料復刻や「茶の湯古典叢書」（思文閣発行）の継続など、茶書復刻の重要性が認識された証しといふことができる。

茶書の復刻が、茶道研究にどれほど多くの恩恵をもたらしたかは、今更言を新しくして述べることはない。それは、現代の陶磁器研究が、近世考古の発掘調査によって大きく変化していることと同じくらい重要なことであつた。特に『松屋会記』や『天王寺屋会記』『宗湛日記』などの茶道成立期の茶会記が、利休以前の時代から織部・遠州に至る江戸時代初期までの茶法や茶器の解明に果たした役割は、たとえようもないくらいに大きなことであつた。

近代における茶道研究は、茶書の復刻から始まつた

といえるのではなからうか。維新後の欧化主義のため、我が国の伝統文化や伝統芸能が見捨てられたあと、ナシヨナリズムの復活とともに女礼式としての茶道点前の書の出版は頻繁になつたが、茶道研究としては茶書の復刻からはじまつた。例えば、明治三四年に刊行された『古事類苑』や温故学会が明治四四年に刊行された『群書類従』『続群書類従』には、多くの茶書の復刻や抄出がなされており、明治四二年には益田純翁が所蔵する『宗湛日記』を山本麻溪が復刻出版している。麻溪はその後茶書の渉獵をはじめ、『南方録』の活字化や『茶事年鑑』『古今茶湯集』などの出版をするなどして茶道研究の進展に少なからぬ貢献をなしている。

ところで、『群書類従』等の古典書の集成は別にし、明治時代以後の茶道古典書の集成としては、昭和八年に橋本博が編集した『茶道大鑑』をもって嚆矢とする。幕末には小枝略翁による茶書の集成書『茶事集覽』が版行され、立花実山『壺中炉談』や稲垣休叟『松風雑話』など六本の茶の古典が収録されており、明治にはいると『史料大観』のなかに山科道安の『槐記』が収められることはあつたが、正式な意味での茶書の

集成としては『茶道大鑑』が最初といってよかつた。同書に収録された史料は、『喫茶養生記』『このめの説』『源流茶話』『茶道筌蹄』『茶器弁玉集』等の貴重な茶書二十六編が上下二巻に収録されている。『茶道大鑑』の出版は大きな期待をもって迎えられたらしく、昭和十一年には『茶と茶人』と改題されて再版されている。その後、橋本博の業績に影響を受けて、茶書研究に意欲的に取り組んだのは、松山吟松庵・末宗廣・鈴木半茶の各氏であった。吟松庵は、『茶道大鑑』が出版された同じ年の昭和八年には『茶道四祖伝書』の復刻をおこなっており、続いて『宗湛日記』『津田宗及茶湯日記註』などを復刻出版し、鈴木半茶は『利休全集』を編し、末宗廣は各種の茶書に注目して『茶道全集』(創元社発行 昭和十一年)十五巻のなかに収録された茶書復刻の中心的な役割を果たした後も茶書研究を継続し、のちに『茶書の研究』(『末宗廣著作集』上巻)としてまとめられている。

リテイクもなされているので、一部を除いては資料引用としても十分に耐えうるものとなっている。しかし、原典主義が重視される最近の研究姿勢からか、『茶器名物図彙』『南方録』『天王寺屋会記』『宗湛茶湯日記』などの影印本発行を経て、最近の『山上宗二記』の諸本比較と研究に及んで、茶の湯研究の方向が定まったといつてよからう。茶書研究は、近年になって随分進捗したといえよう。しかし、茶道全体の研究を考へる上においては、未だ道半ばといわざるをえない。特に、江戸時代の茶道研究は今後に委ねられているといえよう。多分一万点は優に超えるであろう茶書の多くは、江戸時代に書かれたものであるが、それらの多くが眠ったままになっているからである。といつても備忘録としての点前・作法書や茶法の伝授書が多数をしめている茶書群は公刊される躰のものではない。一方、自伝史の備忘録である『松屋会記』や『天王寺屋会記』などの茶会記が、茶道研究にどれほど多くの役割をはたしたかは周知の通りである。茶会記の復刻は『茶道古典全集』以来、『木の井文庫 研究と資料』などに試みられたものしばらく途絶えていたが、最近になって『小堀遠州茶会記集成』

や『江岑宗左茶書』『金森宗和茶書』『片桐石州茶書』等に収められた茶会記などによつて、江戸時代の茶道界の様相が次第に明らかになってきた。さて、そこで私の夢を述べらば、国文学の世界の基本図書ともなっている岩波書店の『日本古典文学大系』『日本思想大系』『新日本古典文学大系』に匹敵するような、『茶道古典大系』の出版がどこかの段階で叶わないものだろうかということである。岩波書店の業績を賞して、先に記した意図を理解していただいて、何れかの出版社がこの企画に乗ってくれることを夢見るのみである。

大会

本年度の総会を五月二十日(土)東京のプラザエフで開催した。H・S・ヘンネマン、神谷昇司両氏を議長に選出したのち議事に入った。昨年の事業報告・決算報告が、日向理事、谷理事から説明されたのち、本年度の事業案・予算案が日向理事、谷理事から提案され、了承された。また「会誌原稿執筆規定」・「会誌原稿審

査規定」・「会誌編集委員会規定」の一部改正案について小泊副会長より提案がなされ、了承された。

(平成十八年事業計画)

大会

日時 平成十八年五月二十日(土)
場所 プラザエフ(東京都)
内容 研究発表・総会・シンポジウム・懇親会

研究会

第二十三回
日時 平成十八年八月後半
内容 寧波大学にて研究会
茶文化博物館・天台山などの遺跡
見学
第二十四回
見学を含めた内容で検討中

例会

東京例会(会場 東京芸術大学 午後二時〜)
四月十五日(土)
田中秀隆氏「茶文化表象とアジア認識」

六月十七日(土)

岩間眞知子氏「茶本草」(仮題)
高橋忠彦氏「茶書と詩語」(雲脚・粥面・水痕)再考
七月八日(土)
矢野 環氏「大名・将軍家の道具管理」
鈴木禎宏氏「民芸運動と茶道」

九月十六日(土)

多比羅菜美子氏「香合について」
トーマス・エクホルム氏「明治時代の茶の湯の普及について」スウェーデンを例に
十一月二十五日(土)

岩田澄子氏「相伴者同伴の貴人のもてなし」
依田 徹氏「今泉雄作について」
一月二十七日(土)
酒井吐夢氏「古田織部と京三条の瀬戸物屋」
谷村玲子氏「松平定信の茶の湯」

東海例会(会場 名古屋文化短期大学 午後六時〜)

四月二十八日(金)
竹内順一氏「織部と籠花入」

日比野猛氏「尾州千家茶道の記」

六月三十日(金)
中村昌生氏「桂離宮について」
九月二十二日(金)
清水 実氏「三井文庫の茶道具」
加藤忠三朗氏「尾張藩加藤忠三朗家の歴史と釜の製法」

十一月二十四日(金)

小川後楽氏「なぜ煎茶なのか」
佐藤豊三氏「大名家の茶の湯」

高知例会(会場 高知県立文学館慶雲庵茶室)

五月二十八日(日) 十時〜十六時
「茶の湯文化学会大会をテーマとしたシンポジウムと茶事」
九月十七日(日) 十時〜十二時
「尾戸焼考証」
十二月十日(日) 十時〜十七時
「現在の侘び茶をテーマとしたシンポジウムと茶事」
二月二十五日(日) 十時〜十二時
「久右衛門日記を読む」

以上のほか高知県立文学館慶雲庵茶室において茶席を設ける。

近畿例会（会場 池坊短期大学第一会議室）

午後七時～九時

十一月十七日（金）

谷端昭夫氏「公家茶道について」（仮題）

柴沼裕子氏「松花堂昭乗について」

二回目は来年一月、3回目は三月に予定。

研究発表

今泉雄作の茶道具論

依田 徹

今泉雄作は、岡倉覚三の文部省、東京美術学校における同僚であり、日本美術史の構築に大きく関わっている。その実際の研究範囲は、絵画・金工・漆工など多岐にわたっており、江戸時代の国学などに通じる網羅主義的な性質を示している。その中で日本陶磁史総説の構築を目指すと同時に、茶道具に関しては名称の由来の考察などを行った。また茶の湯研究全体への貢献としては、帝国図書館（現在の国立国会図書館）への茶書コレクション、通称「今泉文庫」の寄贈が高く評価されている。今泉の茶道具論は、活動時期が重なる高橋義雄と比較すると顕著に特色が表出する。『大正名器鑑』で知られる高橋の茶道具の記

述は、伝来を有する名物に多くの関心を寄せているが、今泉は茶入・茶碗を語りながらも名物にはほとんど言及しない。今泉の研究は資料の考察を中心とした考証学的な側面が大きいのも一因であるが、絵画や普通の陶磁器に関しては自身が勤めていた東京帝室博物館の所蔵品をはじめ有名作品の図版を用いている。茶道具に関しては、自分が所持している道具の図版を使うなど、傑作から作品の美を説明しようとする態度を見せていない。

また今泉は、図案家としての側面を持っている。東京芸術大学所蔵の講義記録ノート「図案法筆授」により確認されるその体系は、『南方録』に遺されているカネワリ法と同系統のものである。特に円の比率を用いて器形、つまり側面から見たときのプロポーションを割り出す方法論を中心としており、東京と京都でしばしば行っていた。板谷波山や香取秀真からもこの講義を受けていた可能性が高く、器形に重点を置く大正期の工芸論の源泉の一つと見ることも可能である。

今泉の特性は、当時のポジションの高さにも関わらず、歴史から忘れ去られているという点に帰される。岡倉や高橋が茶道史において重要な位置を与えられている反面、何が切

り落とされたのかも確認しなければならない。それら全体が茶の湯の近代化なのであり、その検証において今泉の持つ多様性は意義深いものではないだろうか指摘した。

奥田正造の茶道教育—思想と実践—

布笠千加子

奥田正造は、大正から昭和初期にかけて、茶道を教育の中核として捉え、人格教育を実践した教育者であり、わび茶を完成した千利休の簡素静寂の精神を汲む「こころの茶」を提唱した人物として知られている。

奥田は、学校教育の中での手前稽古を、必要最低限の道具と所作で出来る「薄茶平手前」に特化し、更にその精神と身体が「一如」となるよう、徹底的に厳しい稽古を実践した。学校教育現場において、このような方法論を導き出した理由には、奥田が茶の手前を「生活上の行の修行を結晶せしめたもの」と捉え手前によって「生活の規範」を身に付け、「心身を練る」ことにこそ、人格形成における決定的な要因があるとみていたからである。

これらを前提に、『南方録』が提示する、書院台子の茶と草庵小座敷の茶との二つの修行論の展開と、奥田の方法論との関係を考察。

『南方録』が、「心の至る所は、草の小座敷にしることなし」として、草庵の茶を心の修行の最高位に置いているという命題に対峙することによって、奥田の茶道教育の方法論を読み解くことが可能となる。具体的には「薄茶は真の茶である」等のキーワードを中心として、奥田の言説を手掛かりに、『南方録』の修行論がどのように理解され、どのように実践され、茶道による教育のありかたへの理論的根拠の一要素となっていたのかを考察した。さらに、奥田が理想とした「生活の規範」を目指す先には、奥田正造の「茶の間」論への展開があったという点にも言及。

有楽流の台子飾りの特徴とその起源

加畑 長

織田有楽斎の茶風は「書院台子の茶を基」としている（『近世茶道史』谷端昭夫著）が、その特徴の具体例として、台子に先立つ諸道具の飾り付け、台子七つ飾りの数え方などがある。

「台子七つ飾り」には、（一）台子の地板に釜、水指、柄杓立、柄杓、火箸、建水、蓋置の七つを飾る（『草人木』『古織茶湯書』『江岑閑書』）、（二）台子の天板に茶入、

天目茶碗（天目台共）、地板に釜、水指、柄杓立（柄杓、火箸共）、建水、蓋置の七つを飾る（『石州三百カ條』『茶道旧聞録』『数寄閑書』『茶道律集』）、（三）床に掛軸、花入、台子の天板に茶入、天目茶碗（天目台共）、地板に水指、柄杓立（柄杓、火箸共）、建水（中に蓋置）の七つを飾る（『貞要集』）の三通りがあり、有楽流の台子飾りは、（三）に見られるように、床と台子を一体と考え、七つの中に掛物と花入を数え入れる（釜は数えない）ものである。

有楽流の台子飾りの特徴としては、体系化、床と台子を一体とする理由、有楽流の台子飾りの起源について考察。

（一）台子飾りの体系化は、織田貞置公により完成された（宝永七（一七一〇）年に『貞要集』成立）。

（二）床と台子を一体化する理由は（イ）墨蹟を数に入れる、（ロ）炬、風炉共に七つ飾りを行う、（ハ）長板に七つ飾りを行う、（三）『茶道正伝集』に記述されている「有楽十ヶ条」の中の道具かざり「数の法のならない」を遵守するためと考えられる。

（三）有楽流台子飾りの起源は、「床を設けて、ここに茶道具を飾ることとした」珠光の

茶風と考えられ、また床と茶道具の置合せを示す初期の茶書として、珠光流を継ぎ信長公の茶頭であった不住庵梅雪著「数寄殿之図」、及び「鳥鼠集巻二座敷図」があげられ、梅雪が有楽斎に「珠光流」の茶を伝えたであろうことを指摘。有楽斎は「伝統的な書院の茶」『御飾書』の茶（能阿弥流）を保持し続けていたこと「はすでに、「文禄三年前田邸御成記」などから明らかにされており、有楽斎は、珠光流を基に独自の茶風を創設した茶人であったと考えられる。

近代以前の女性と茶の湯

矢野夏子

近代において茶の湯人口が増大した要因は、学校教育の中で女子教育に教科として茶の湯を取り入れたことによるという認識が、近代茶道史及び女性と茶の湯の関係性について論考される中で定着している。一方、近代以前の一般女性と茶の湯に関する論述は、管見の限り少なく、江戸時代前・中期において、茶の湯は女性から遠いものと考えられていた。近世前期から明治以降も刊行され続けた女訓書（女子用往来物）の中には、女性にかかわる茶の湯の記述が複数存在し、教授にかかわ

らない一般の女性も近世前期に茶の湯を嗜むことができたことを確認できる。

元禄五(一六九二)年刊行の女訓書『女重宝記』第一巻「女中万たしなみの巻」の「茶のゆする事」、さらに正徳三(一七一三)年に刊行された『女源氏教訓鑑』の茶の湯の記事は、『女重宝記』が刊行された翌年の元禄六年に『女重宝記』の作者苗村丈伯が著した『男重宝記』第三巻の一「茶湯たてやう喫やう並に諸札」を参照して書かれたことがわかった。これは女性たち自身が茶の湯とかかわり、嗜むための知識を必要としていたことを示す証左と考える。

シンポジウム

「北野大茶湯を考える三つの視点」

田中秀隆(司会)：天正十五(一五八七)年十月一日に行われた北野大茶湯から、四二〇年の時を経て北野大茶湯の幅広い学術的研究の必要性を考える。研究史を概観してどのようなことが現状において述べられるか。三つの論点が考えられる。まず北野大茶湯の三五〇周年(昭和十一年)に昭和北野大茶湯が十月八日から五日間にわたって行なわれた。この際に、昭和北野大茶湯の記録が作成される

湯は、北野大茶湯以前にも行われていたことが知れる。

矢野 環：北野大茶湯の資料は、どのようなものが存在するか明確にする。明確にすることによって、精度の高い研究が可能となる。

まず、諸本の生成構造を検討する。これまで、群書類聚本・内閣文庫本・久田本・上田本等が紹介されているが、これら諸本の検討を試みる。使用道具の名物度として天文の頃から名物であったのか、山上宗二の頃から名物になったのかを考える必要がある。更に、古典的名物ということではないが、秀吉が特に好んで使用した道具に関して検討する必要がある。従って資料として、天文期の基準は『清玩名物記』、天正期は『山上宗二記』を中心に道具を考察する。そして『天正十三年名物記』の中に秀吉所持の名物道具リストがあり、これは大変重要な記述といえる。また秀吉の茶会の使用道具に関しても重要なことは言うまでもない。また利休が宗及・宗久に対して、極めて優位であったことは明白ではあるが、改めて確認しておく。道具が全体としてどのように茶席に配置されていたのか復元図がないので、茶席配置の推定概念図を作成して

が、天正時代の北野大茶湯はどのようなものであったか学術的な関心を背景に成立した記録である。史料の発掘を含めて今日的な茶道研究の出発点となった『茶道全集』刊行を支持した財界人・知識層は、同時に北野大茶湯に参加するメンバーとも重なってくる。『茶道全集』を生み出した知的欲求は、創成期の茶道への関心である。その土壌の中で、昭和北野大茶湯は、三五〇年前の北野大茶湯の歴史的復元をも意図していた。この時に発掘された史料は、『茶道古典全集』に「北野大茶湯之記」および関連資料を収録する際のベースとなっている。昭和十一年には『北野大茶湯考』という書籍も出版され、北野大茶湯の研究が本格化される。しかし秀吉がなぜ北野大茶湯を行うに至ったのか、その意義は何か、通説が存在しない状況である。どのような史料を採り上げかによって結論が異なることにも繋がってくる。信頼性の高い史料を採用して論を進めることが望まれる。近年、北野大茶湯をどう考えるのか、影が薄れてしまっている。「北野大茶湯考」と題した座談会が利休四百年忌の折に行われた。この座談会も含め、北野大茶湯研究の出発点として、道具・資料・歴史的意義の三つの視点から座談会を

検討。「北野本」によれば拝殿周囲の四茶席の配置は、予定では秀吉・宗及が東、利休・宗久が西であったが、当日は東西が入れ替えられたとする。拝殿の西に秀吉、東に利休という配置は興味深い。参集茶人の道具に関しては、ほとんど情報が無く、書状等の資料は十分慎重な扱いが必要と考える。

中村修也：北野大茶湯は、秀吉の大イベントであったが、これをどう見るか大きく分けて茶道史の立場と日本史の立場から考えなければならぬ。『兼見卿記』・『多聞院英後日記』などから、大茶湯が迷感であった京都の公家達の性格を考えなければならぬ。秀吉政権に対しての表と裏があり、表向きは歓迎しているかのように見えるが、裏側ではあまり秀吉に対して気持ちの上で受け入れられず、むしろ反感心が強かった。そのあらわれが北野大茶湯への積極的参加に繋がらなかったと考えられるのではないだろうか。秀吉のイベントは、一般に成功であったかのように考えられているが、北野大茶湯は十日間にわたり行うほど動員がなかったと考える。『長闍堂記』によれば、大茶湯で評価された人物は、美濃の一化と京都のノ貫の二人で、どちら

すすめる。

竹内順一：北野大茶湯を過大評価するのでなく、実際に行われたことは特異なイベントであったと考えている。わび茶の成立期には、変わった工夫とか、変わった茶会が存在したのではないだろうか。その最大なもの、政治的な力をもって為政者が行うのであるから、内容は特異ではなかったのではないか。むしろ特異さを見るとするならば、天正十五年という、わび茶の湯が完成しようとする時、色々な段階があるが、天正十年の後半から、茶の湯の変化があったのではないか。一つの頂点をむかえると思うが、その真つ只中で行われる異常さがあるのではないだろうか。考える。北野大茶湯の「以前」と「以後」という表を作成したが、これは茶会記などを中心に道具等の一覧として作成。北野大茶湯以前から特異な、変わったわび茶の湯を形成して行くところから少しはみ出した茶会があったのではないかという、跡付けるものをあげている。為政者・天下人の茶会ということであるから、信長・秀吉・明智などの茶会をあげて、特異な、はみ出したものを特記事項として記した。外で茶会をする野点のような茶の

らも京都公家衆から見れば身分に大きな隔たりのある。また京都の上層町衆すら評価されていない。一目目はとにかく成功した評価であったのでこれで中止してしまおうと政治的判断をしたのではないだろうか。この後、秀吉は名護屋に出陣してから、茶の湯から離れ始め、能へに関心を移すことになる。

田中秀隆：資料・道具・歴史の観点から北野大茶湯を考えてきたが、最後に整理をしておく。資料に関しては、上田本に対して北野神社本を復権するという資料の再評価を提案することができたとと思われる。また道具の形からいえば北野大茶湯は、別に特異なものではなくて、様々な茶の湯のスタイルの集成としてみるべきではないかと提案できると思われる。更に歴史的観点からすると、我々は秀吉なら、何でも成功可能と評価しがちであるが、北野大茶湯は、一目目は成功したのかも知れないが、全体として、秀吉が意図していたことからうまく行きそうも無かったので一日で茶会を終了するに至った。京都の町衆・朝廷等の関係という背景を踏まえて、北野大茶湯の意義も考えなければならぬのではないだろうかという提案をすることができた。

これらの提案を基に訂正を加え研究の場が広がって行くことを学会として期待したいと思う。

例会のご案内

東京例会

日時：九月十六日(土) 午後二時

場所：東京芸術大学

演題：「香合について」 多比羅菜美子氏

演題：「明治時代の茶の湯の普及について

―スウェーデンを例に―」

トーマス・エクホルム氏

日時：十一月二十五日(土) 午後二時

場所：東京芸術大学

演題：「相判者同伴の貴人のもてなし」

岩田澄子氏

演題：「今泉雄作について」 依田 徹氏

東海例会

日時：九月二十二日(金) 午後六時

場所：名古屋文化短期大学

演題：「三井文庫の茶道具」 清水 実氏

演題：「尾張藩加藤忠三朗家の歴史と

日時：十一月二十四日(金) 午後六時
場所：名古屋文化短期大学
演題：「なぜ煎茶なのか」 小川後楽氏
演題：「大名家の茶の湯」 佐藤豊三氏

近畿例会

日時：十一月十七日(金) 午後七時～九時

場所：池坊短期大学第一会議室

演題：「公家茶道について」(仮題)

谷端昭夫氏

演題：「松花堂昭乗について」 柴沼裕子氏

高知例会

日時：九月十七日(日) 午前十時～十二時

場所：高知県立文学館 慶雲庵茶室

演題：尾戸焼考証

後記

*前号に東京例会の発表の要旨を掲載いたしました。岩間眞知子氏の要旨に誤字が複数ありましたので今回訂正文として掲載させていただきます。申し訳ありませんでした。

更に「苦菜」の別名「選」を発音から茶の別

名「薺」とみなすと、この「苦菜」は茶と同等される。(中略)：日本最古の本草書・深根輔仁の『本草和名』に、茶は「茗苦菜」と記される。また日本最古の医書・丹波康頼の『医心方』に「茗苦菜茗和名茶」とあり、「茶」を「和名」としている。茶を表す「茶」の文字は日本の文書によく用いられる。(中略)：『類聚名義抄』と見てゆくと、茶を表す文字に襟・榎・薺・茶・茗は確認できた。「茶」は『類聚名義抄』にキョウと発音すると記されるが、確実に茶を表す文字と認識されていたとは断定できなかった。

しかし例会発表後、平安最末期に成立した最古の国語字書『色葉字類抄』(平安末期書写三卷本 前田育徳会蔵)の項に「茶」があり、「チャ」また襟と作る「葉名」とカナで明記されることに気が付いたと、補い述べられた。

*前号でもお知らせしましたが学会のホームページが更新されています。例会のご案内や研究会の開催などについても随時お知らせします。是非ホームページもご利用下さい。